

『虞美人草』とリチャード三世

Junko Higasa

以前に、書齋で継母を前に甲野さん(ハムレット)が書いた「烏」の表すものは「Come; the croaking raven doth bellow for revenge. (さあ; しわがれ声の大ガラスが復讐のためにわめいている)」(ハムレット第三幕第二場)と書いたが、これを読み込むともっと凄い話になる。その奥にあるのは同じくシェイクスピアの「The Tragedy of King Richard the Third(リチャード三世の悲劇)」である。

なぜそこへ辿り着くかという、第一に漱石は『永日小品』に書いてある通り、ロンドン留学中に「アーデン・シェイクスピア」という沙翁全集を監修した「クレイグ先生」の個人教授を受けた。実際に習ったのは英詩ばかりだったようだが、それでも帰朝後の講義にその本が役立つほど沙翁に馴染んでいた。第二に漱石はロンドン塔を訪れており、『倫敦塔』という作品を書いている。ロンドン塔は薔薇戦争と呼ばれるランカスター家(赤薔薇)とヨーク家(白薔薇)の王位継承内乱に関わった場所である。当時ランカスター家のヘンリー六世から王位を奪ったヨーク家のエドワード四世にはクラレンス公ジョージとグロスター公リチャード(後のリチャード三世)という弟がいた。その兄たちの仲が悪いのを幸いに、生まれつき背骨が曲がっていたグロスター公がコンプレックスから王位を狙って陰謀を巡らした。その争いにおいて、ロンドン塔最大の悲劇といわれているのは、そこに幽閉されたエドワード四世の二人の王子(十三歳で即位したエドワード五世と十歳位のヨーク公)が塔内の片隅で密やかに命を奪われたことである。漱石の『倫敦塔』にもその二人が登場する。『二人とも烏の翼を欺く程の黒き上衣を着ているが色は極めて白いので一段と目立つ』漱石はそこにシェイクスピアの戯曲の言葉を重ねて、意識の中に深い歴史を再現した。この「血を血で洗う争い」「グロスター公の黒い陰謀」が『虞美人草』の中に呼び覚まされたと思われる。

また更に、グロスター公の陰謀の影には女性問題がある。幽閉暗殺された幼い王子たちの母であるエリザベスにはエリザベスという娘がいた。その娘は王子たちの姉にあたる。母は娘の命を救うために「王の血を受けない不義の子」と偽ろうとまでするが、逆にリチャード三世は娘エリザベスを妃にと望む。元王妃は息子の敵に娘を嫁がせる協力を要請されるという実に複雑な話であるが、ハムレットも夫の敵に嫁ぐというストーリーであるから、その辺は置くことにしよう。問題は「不義の子と偽る」というところである。『虞美人草』の甲野欽吾の書齋における継母の以下の言葉に注目しよう。『(前略)まあ我慢して、本当の妹だと思って、面倒を見て遣って下さい』確かに藤尾は腹違いの妹である。しかし父が同じならやはり血を分けた妹である。しかし漱石はそこまで書いていない。そう考えるとエリザベスの母の偽りは、藤尾の母にとっては血縁関係において真実という仮説も成り立つ。即ち連れ子である可能性である。欽吾と藤尾の年齢差と妊娠期間に関わる結婚制度から考えて、藤尾の母が妾であったか、連れ子をした後添えであったかは微妙な所である。

いずれにしても読み込むほどに、関西には和風の平家物語、関東には洋風のシェイクスピアと、漱石が読者サーヴィスに深く心を砕いた重みがひしひしと伝わってくる。神経衰弱も胃潰瘍も悪化する訳である。それにしても漱石の英文学は深い。(2014.2.28)